碩　心

社団法人　日本詩吟学院岳風会　認可可
神奈川　碩心会　発行行

62年1月号（174号）
発行者
根岸岳萃
編集者
中村愛岳

62年1月現在会員数

逗子地区	175名
葉山地区	281名
大船地区	63名
（合計）	（519名）

新年のごあいさつ

会長　根岸岳萃

明けましてお目出度うございます。会員の皆さんが御家族共々良い新年を迎えられましたこと心からお慶び申し上げます。

碩心会も皆さんの御協力により発展しつつ新しい年を迎えることが出来ましたことは誠に同慶に堪えません。特に本年は、昭和十二年に松井先生が創立された碩心会が五十周年を迎え、来る六月十四日には記念行事として、盛大に吟道大会を開催する運びになっており、担当役員は昨年から其の準備に追われております。しかし其の大会が成功するか否かは、皆さんのご協力、ご支援に待つところ大であります。

本年も二月中、県本部主催高段者審査会があり、又三月十五日には碩心会の前期審査会が予定されているように、行事も大分予定されております。

昨年末の円高不況は造船、製鉄を始めとして、全ての輸出産業に、強いては各家庭経済を今年も圧迫してくるものと思われますが、このような時にこそ〝吟道〟を糧に力強く生きることこそ必要ではないでしょうか。

今年も皆さんが、あくまで健康で、楽しく吟道にご精進されますことを、心からお祈り致しまして新年のご挨拶と致します。

あけましておめでとうございます

（指導者一同より）

松井岳洋　根岸岳萃　加藤岳相
三井岳瓏　沼田洸岳　井沢潮岳
小峰桜岳　加藤圭岳　中村幸岳
竹石憲岳　千葉劒岳　千葉香岳
中村愛岳　鈴木萃岳　森田暁岳
岩崎恵岳　鈴木孝岳　守谷崇岳
松野宝岳　杉山雪岳　秋元梁岳
佐藤湧岳　石渡桂岳　矢嶋悦岳
黒崎李岳　広瀬翔岳　村田瀞岳
沼田義岳　清水耀岳　伊藤峰岳
白井寿岳　白井麗岳　上村象風
金指萌風　渡辺誠風　一柳道風
佐久間爽風　木村松風　田上洲風
寺脇歌風　立沢御風　小形雄風
行谷佳風　松井正風　千葉美風

62年度おもな行事予定

（総本部関係）

3・8(日)第91回全国大会……中野サンプラザ
7・5(日)全国選抜者大会……九段会館
7・26(日)全国青少年大会……九段会館
8・1(土)2(日)夏期講座……
9・13(日)第92回全国大会……九州宮崎

（神奈川県本部関係）

1・25(日)初吟・初理事会……平塚農業会館
2・8(日)七段審査会……平塚農業会館
2・15(日)八段審査会……平塚農業会館
2・22(日)皆伝以上審査会……平塚農業会館
4・19(日)選抜予選会……平塚農業会館
5・10(日)総会……平塚農業会館
5・31(日)横一地区吟道大会…
6・7(日)青少年吟道大会……
6・28(日)横二地区吟道大会…鎌倉中央・分館
7・12(日)京浜地区吟道大会…
8・23(日)指導者講習会……
9・12(土)～9・15(祭)
92回全国大会吟行会…宮崎～長崎
9・27(日)湘南地区吟道大会…
10・18(日)県本部吟道大会……
11・22(日)23(祭)高段者研修会……
11・28(土)納吟会……

62年度

高段位審査実施について

（受付）（開　始）（終了）

◇七段…2・8(日)…9時…9・30分…17時
◇八段…2・15(日)…9時…9・30分…17時
◇皆伝以上…2・22(日)…9時…9・30分…17時
◇審査会場…平塚農業会館（各段位共）
◇受審料…二千円（各段位共）当日受付に納入（昼食は各自持参）

人生の触れあい

相談役　三井　岳瓏

世に袖ふれあうも多少の縁という言葉があります。仏教の縁という文字からきたものだと思われます。今年の新春に左の拙き腰折を作りました。

やうやくに八十路の春を迎えけり
ふれあいし人のありがたきかな

人は色々の処で色々の人と会い、又別れて行きます。八十年の人生で、いまだに縁であったなあと思うことが色々ありました。身内肉身は勿論、級友、戦友、職場の友、吟の同好の士との中からです。私の職場は旧海軍と、横須賀米軍基地だけでしたが、米軍基地の終戦後の二十年近く、ふれあいつきあっていただいた人々との毎年の会合が、殊の外楽しく思い出深いのも、このふれあいを大切にしたからだと思っています。

基地の昼休みに時折聞える吟声、海岸で独り吟じている或る人の姿も見受けました。元来私は、小学校三年の時から、母のすゝめで漢文の素読に二年通わされ（頑固な百姓をやっていた武士の果の先生が亡くなられるまで）孝経中庸孟子論語を、最後は楽しく読みあげることが出来ました。漢文の好きになったのも、この先生とのふれあいと思っています。

横修厳吟道会（後に根岸先生が会長）の海軍の先輩・鎌倉の安川さんが、逗子には松井先生という立派な大先生がいられます。会を作って詩吟の勉強をすゝめられたことが縁となって、根岸先生を主体とした碩心会が結成されていました。会に入会の決心をしたのは、その後半年位後でした。松井先生、根岸先生とのこのふれあいがなかったら、私の今日の余後の人生、老後の味合深い今日の幸福な人生はなかったと、しみじみ感じ入っています。

両先生の高邁な人格に触れ、吟に対するあの情熱豊かな人間性が、私をひきつけて離さなかったからです。五人の子供を残し先立った妻、老母を抱えての生活も、木曜

日が来ると、取るものもとりあえず、あの吟声を聞きにかけつけていったのでした。又この錬成中に、知りあい、ふれあった吟友のすゝめもあって次々と教場を作り、一時は百人以上のお弟子さんが出来、この方々とのふれあいの楽しさ、話しあいの楽しさが沁々私を励まし援けて、所謂苦を忘れさせて下さったことも誠に有難いことと思っています。

小林紫舟先生とのふれあい、弟子入り十年も、その伴吟と共に忘れられないし、おかげで有馬信代先生にも触れあうことができ、その絶妙ともいえる吟のご指導も有難いことの一つでした。

松井・根岸両先生とふれあいを大切にし、そのご指導を心ともし、杖ともし、ありがたい吟友・お弟子さん達とのふれあいの縁をよすがとして、身体の続く限り、声の出る限り、吟道に精進したいと念じ、皆様のお力添えをお願いして筆を擱きます。

逗子地区温習会を終えて

葉月　鈴木　劭泉

61年12月14日(日)逗子図書館ホールに於て盛会裡に終了した。この会は葉山・逗子・大船の三地区輪番制なので三年毎に各地区で開かれる。

各役員は開始50分前に集合し、責任者を中心に着々と準備を進め、定刻9時30分の修礼でブロ通り進行した。ブロ150番中・欠席7（4.6%）であったが、欠席者は事前に届出をして下さると、受付・進行に好都合なので、今後はその励行を願いたい。合吟者の欠席が多く、半数にも満たなかったり、甚だしいのは独吟になってしまった処もあった。合吟であってもブロに名を出したからには責任を果してほしい。又吟題変更も多少あったがこれも慎しみたいものです。吟が終って「失礼しました」と言う人もあったが、あれは不必要で、若し失敗したら礼を深めにし、次回には挽回してほしい。

聴衆の大半は出演者の筈だが、場内マナーはとてもまだまだの状態だった。進行係から再三注意されたが、雑談が多く、出入ももう少し姿勢を低めるとか、足音を静かに、できれば吟詠中は出入を慎しむ位の配慮があってもよいと思う。

ブロ進行は全く完璧で流石であった。ブロ作成者と進行係に深く敬意を表したい。即ち16時20分終了予定だったが15分早く終了した。これは欠席7人分の時間で、前後中間の役員先生方の御挨拶時間も適切で、根岸先生の発音アクセント抑揚について、方言であっても努力次第で直すことができるとの御注意、千葉先生の会の御説明と当日義士討入りに当ってのお話も大変感動的であった。

立体吟詠も光っていたし、葉山・大船地区からの協賛吟詠も有難うございました。

多少苦情がましくなりましたが、今後の会の向上発展の為とお許し願いたい。運営役員の皆様、出吟出演の皆様御苦労様でした。

納　会（望年会）

堀内・D　菊川　甫泉

早いものでもう年の瀬…。昨年は新年こそは〝吟の年〟にしたいと反省し、新年に望みをかけましたがまゝならず、あわたゞしさの中に、本年も堀内D組の忘年会の通知を頂いてしまった。そして出席させてもらい、紙面をお借りして、皆様にお礼を申し上げる次第です。

では納会の状況をお伝えして、皆様のこれからの発展と健康を祈念いたします。12月6日(土)出席者20余名がそろったところで中村愛岳先生は「今年も皆様からのもり上りで納会が持たれた事に感謝している」と挨拶。続いて沼田真風さんの挨拶、高梨誓

風さんの乾杯の音頭で納会が始められました。会のお料理は幹事さんが鮮かな手料理が手際よく卓上に並べられ、程よく酒も体にしみわたり、料理を賞味しながら年の瀬の会話に花が咲き大満足。そして程よい頃合いから順次吟に入り、〝城山・本能寺・吉次峠の戦・天草洋に泊す〟と、朗々たる吟声は師走の夜にながれた。宴たけなわとなり、なかでも85才という高梨誓風さんの〝天国に結ぶ恋〟は極めて実感がこもり大拍手。拍手の中で沼田真風さんの〝木遣〟を所望する声も出て、吟に、カラオケに、長い師走の夜も短かく「至誠一貫」「一吟天地の心」。そして最後に〝大正生まれのうたが中村幸岳先生により披露されました。会場提供の中村先生、そして幹事の皆様、本当にありがとうございました。

練吟メモ　素　読（一）

○新しい漢詩に取りかかる前には、素読を励行するように指導されていることと思います。ところで、素読とは一体どういう意味があるのかしら。辞典によれば、文の意味は考えないで、ただ文字を声をたてて読むことであると説明しています。これを音読またはすよみと称することもあります。

○素読はむかしから行われています。徳川幕府の時代から明治初年にいたる寺子屋の教科内容は、あくまでも実用に即したもので、いわゆる読み書き算盤が重きを占めていました。それからさらに勉強するものには、男子は四書の素読、女子は「小倉百人一首」や「女大学」を教えた（明治百年の教育・唐沢富太郎著）ということです。

○現在の小学校一年生は、入学時すでに95パーセントがひらがなを完全に読みます。幼稚園とテレビで育った子供達の言葉の力は、戦前とはまるで比較になりません。従って、一年生の国語教科書の内容は全く変ったが、しかし、基本的な教育要領は、昔も今も変っていないところがあります。

○現在の一年生の国語の本は、始めはほとんど絵ばかりですが、9ページ絵入りで

ひかる　ひかる　そらの　ほし

になります。先生がこれを範読すると、生徒は一斉に声をはり上げて斉読します。先生はその後で、こんどは一人ひとりにそれを音読させます。先生により相違はありますが、寺小屋の昔から今に至るまで、読み書きの読みについては、この斉読、つまり素読が続けられているようです。

○前述のとおり、素読も斉読も声をたてて読みます。それも平らに読むのではなく、正しい発音（高低アクセント）と、段落をきちんとすることが要求されます。

例（高音は・、低音は無印とします）

(1)始めに次のことばを平らに読んでみる。

ひかるひかるそらのほし

(2)次に、高音と低音をはっきり区別して読み、一字空きは一拍置く。

ひかる　ひかる　そらの　ほし

※・が語の中、中、上、下でリズムあり

○漢詩を自分だけで楽しむなら黙読でもよいが、人前での吟詠となると、発音は絶対条件となります。歌謡でも台詞でも同じです。些細なこととして片付けないことです。教室では影響が大きいので、指導に当る方は特に留意していただきたい。発音を無視した素読はなんの意味もないことを銘記して下さい。

（次号につづく）

（入　会）

779 高橋義勝　横浜市旭区左近山一一二五一四〇八（松　和）（電）〇四五一三五二一五七八六

780 深川東山（再）葉山町上山口一一五六一三（唐木山）（電）〇四六八一七八一八五三八

（退　会）

191 堀口桂風（逗子B）

574 矢島よし（唐木山）

719 田中日佐子（上　原）

332 鈴木静山（堀内・F）

652 小菅樹泉（上　原）

756 金子いし（堀内・D）